

「桃太郎」における鬼退治の意味

THE SIGNIFICANCE OF THE SLAYING OF THE DEMON IN “MOMOTARO”

呉 讃 旭*

The most popular of Japan's five great folktales, “Momotaro” (“The Peach Boy”) has been researched from many different angles. Among these scholarly treatments, the folklore research of Yanagita Kunio and Origuchi Shinobu has not lost its vibrancy and continues to give present day researchers many ideas for the study of the tale.

Yanagita's interest in “Momotaro, ” however, is heavily biased toward the first half of the story, which recounts Momotaro's birth and growth. His study slights the latter part of the story—the conquering of the demon. For this reason, we might conclude that “Momotaro” has yet to reveal itself to us in full. Indeed, the character of Momotaro must be understood in terms of the story as a whole, not just the first half. This paper represents an effort toward completing our partial view of Momotaro.

We usually consider the hero of the story “Momotaro” to be

*OH Chan-Wook 東京都立大学大学院博士課程。韓国外語大学日本語科卒業。

Momotaro himself. If we revise this point of view, however, we can conceive of other hidden heroes. In the context of the performance of the tale, there is a narrator and an audience who make up a community. For this community, the grandmother and grandfather are the main “insider” characters. They may in fact live at a boundary-at the river’s edge-but they are the only characters who belong on the inside, within the community.If we regard these two main characters as the axis of the tale, then Momotaro becomes nothing more than a foreigner from a place beyond the river. And for these two people for whom the substance of “Momotaro” is Momotaro’s subjugation of the other foreigner-the demon-the story is, schematically, the tale of the conquering of one foreigner by another.

This being the case, the relationship of the two foreigners-their parity or lack thereof-comes to concern us. Why did the foreigner Momotaro have to conquer the foreigner demon? I believe that these two characters represent the positive and negative qualities ascribed to foreigners. In other words, Momotaro’s slaying of the demon is none other than an act that he, as a foreigner (child of a god) who has drifted into the community from a strange land to settle there, must carry out to prove himself to that community.

—

改めて言うまでもないが、「桃太郎」は長きにわたって日本の代表的な昔話として愛され、それだけに多様な形で享受・研究されてきた。享受面においては、政治体制や時代思潮が変わるごとに、その時その時の時代思想の色合いが

強く反映された解釈がはやるといふ特徴があったが、このような傾向はこれからも繰り返して続いていくだろう。

研究史を振り返ってみると、江戸時代の考証的な考察から近年の記号論的な読みに至るまで実に様々な論考が出されているが、なかんずく柳田国男などの民俗学者の成果は今なお色褪せておらず、我々に多くの示唆を与えてくれている。

柳田は『桃太郎の誕生』の中で、

元は恐らく桃の中から、又は瓜の中から出るほどの小さな姫もしくは男の子、即ち人間の腹からは生まれなかつたといふことと、それが急速に成長して人になつたといふこと、私たちの名付けて「小さ子」物語と言はうとするものが、この昔話の骨子であつたかと思ふ。

と、「桃太郎」を「小さ子」譚として位置付け、その意義は「常人すら尚到低企て難しとする難事業を、始めは普通以下の如く見えた者が、何の苦も無く安々と為し遂げ」るところにあったと述べている^{注1}。柳田は昔話の蒐集調査のための手引書として作成した『昔話採集手帳』に「桃太郎」を筆頭に載せるほどこの話を重視し、その結果として引き出された「小さ子」論は、「この国における民俗学の成立とその出立を約束するものであった」という高い評価^{注2}を得ている。

ところが、柳田の関心は桃太郎の誕生と成長など、話の前半の究明に集中していて、後半の鬼退治の話の究明は疎かにされていた。そのため、「桃太郎」は未だに我々の前にその全貌を見せてはいないとも言えるのである。「桃太郎」はやはり物語全体を通して理解されなければならない。本考はそのための一つの試みである。

二

物語としての「桃太郎」の主人公は、普通に考えると桃太郎ということになるが、視点をかえれば、別の隠された主人公（中心人物）がいると考えられな

くもない。それは、語り手と聞き手の存在を想定した場合のことであるが、昔話が実際に伝承され享受される場、つまり一つの共同体という場を考えた時、「桃太郎」の登場人物の中でその内側に属する人物はお爺さんとお婆さんだけで、彼らこそ「桃太郎」の内なる主人公と言えるのである。そしてこの二人（ひいては物語を享受する側）を軸にして見れば、桃太郎とは、川という境界の向こうから流されてきた一人の〈よそのもの〉に過ぎない。

赤坂憲雄は「存在的に異質かつ奇異なもの」で「内集団の私的コードから漏れた、あるいは排斥された諸要素（属性）である否定的なアイデンティティを具現している他者」を「異人」と定義し、そのカテゴリーを次の六種類に分類^{注3}している。

- ①一時的に交渉をもつ漂泊民
- ②定住民でありつつ一時的に他民族を訪れる来訪者
- ③永続的な定着を志向する移住者
- ④秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マン
- ⑤外なる世界からの帰郷者
- ⑥境外の民としてのバルバロス

未知なる世界から突如現れて異常誕生と異常成長を逃げる桃太郎は、存在的に異質であるばかりでなく、誕生の仕方も成長ぶりも常軌に逸して、赤坂の定義と分類に従うならば、③と⑥の要素を兼ね備えた一人の「異人」にはかならない。

一方、「桃太郎」には桃太郎の他にももう一つの「異人」が登場する。鬼が島という、川の向こうの異界に住んでいるとされる〈よそのもの〉つまり鬼である。「桃太郎」には、鬼については具体的なことが何も語られていないのでその性格が捉えにくいところはあるが、昔話というコンテクストの中で考えると、人間に危害を与える邪悪な存在、ということになろう。参考までに関敬吾編の岩波文庫本『日本の昔ばなし』（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）に登場する鬼をその行動パターンによって類別するとおよそ次のようになる。

(1)村や町に現れて暴れることはないが、山に迷い込んだ人間を捉えて食べたりする。(「三枚のお札」「鬼と三人のこども」)

(2)村に現れて食人・吸血するほか、人間に様々な害を与える。(「鬼の妹」「瓜子姫」)

(3)川や海の彼方に住んでいて財宝を持っており、人をさらうなど悪行をすることもある。(「鬼が笑う」「夢見小僧」「一寸法師」「桃太郎」「五分次郎」)

鬼が島に住み、財宝をもっているとされる「桃太郎」の鬼はこのうち(3)の部類に入るだろうが、退治されるべきものとして登場しているので、(1)と(2)のイメージをも合わせ持っていると言えるだろう。なお、赤坂の分類では⑥に当たることになる。

このように「桃太郎」にはそれぞれ性格を異にする二種の「異人」が登場するが、その一方が他方を退治する内容の「桃太郎」は、図式的に言えば異人による異人退治譚>ということができる。

三

では、「異人」桃太郎はなぜ「異人」鬼を退治しなければならないのであろうか。「桃太郎」には色々の類話があって、いわゆる標準型とは異なった内容の話が各地で語られている。誕生の様相や団子の材料、一緒に連れていく動物の種類など、細部における伝承上の相違も少なくないが、これら非標準型と標準型とのもっとも大きな違いは、話の後半に鬼退治が語られているかどうかである。鬼退治の部分を持たない非標準型の話群は、異人としての誕生・成長を遂げたもののすべてが必ずしも鬼退治に出掛けるのではないことを示しているわけであるが、標準型の場合、数百を超える伝承が伝えられているのにもかかわらず、桃太郎がなぜ鬼退治に出掛けなければならないのかについてはほとんどの場合何も語られていない。

試みに、『日本昔話大成』（以下『大成』と略す）に掲げられている「桃太郎」の類話の中から、鬼退治に出掛ける理由が語られているものを拾ってみると次

のようになる。

- ①桃太郎ある日爺様と婆様といるとこさ来て、ちヤアンとねまって（すわつて）両方の手こつて、「爺さまア婆さまア、吾ア大きくなつたんだしけア、鬼が島さ鬼退治に行きたいしけア、やつて下さエ」て頼んだじオン。
（青森県三戸郡）
- ②一人前になり鬼が島へ鬼退治に行くという。（広島県比婆郡）
- ③桃太郎は成人すると悪い鬼を征伐に行くといい、…。（青森県下北郡）
- ④夜、婆が根にひっかかり、腰を痛める。治すには鬼の生肝が必要。（島根県八束郡）
- ⑤留守居をしていると烏が地獄から日本一の黍団子を持ってきてくれとするした手紙を持って来る。（岩手県紫波郡）
- ⑥鬼が出て悪さをするので桃太郎が黍団子を持って鬼退治に行く。（岩手県東磐井郡） 傍線は筆者、以下同じ。

④⑤⑥などにはそれなりの具体的な理由が示されているが、これらは極めて例外的なケースで、ほとんどの場合が①②③のようにただ「大きくなった」からとか、「一人前」あるいは「成人」になったため、としか語られていない。桃太郎が鬼退治に出掛けなければならないのは、どうもこの「大きくなった」こと、つまり「成人」したことと深い関係があるようである。すると、「桃太郎」にとって、成人するとはどういう意味を持っているのであろうか。

「靈界から神が少童の形で人界に出現」^{注4}した存在と信じられていた小さ子は、当然共同体の人々に普通の人間とは異なる、聖なる存在として受け止められ、育てられたはずである。ところが、かといって彼等が小さ子の聖性を絶対不変視したかといえは必ずしもそうでなかったことを、昔話の小さ子譚は伝えている。

たとえば、小さ子譚の一種である「一寸法師」の類話の中には次のようなものがある。

- ・爺と婆に子供がない。天道様に祈ると、指の腹のような子が生まれる。

大きくならないので暇を出す。…（『大成』3、新潟県佐渡郡）

- ・子のない夫婦が指先ほどの子でもよいと住吉様に祈願する。小さい男の子が生まれ、一寸法師と名づける。大きくならないので針の刀を与え追い出され、椀を舟にして箸の櫂を持って日本の都に行く。…（同、埼玉県所沢市）

この二つの類話を見ると、一寸法師は「大きくならないので」追い出された、とある。異常誕生と共に異常成長は、小さきとして生まれた<聖なる存在>の聖性を証明する根拠であったが、いつになっても大きくならない、つまり成人しない小さきはかえってその聖性が疑われ、追い出される運命にあったのをこの話は語っている。「小さき」といえどもその聖性が認めてもらえなかった場合は、排除を余儀なくされているのである。

しかし、排除されるのは成人しないものばかりではなかった。成人したとしても、しかるべき手続き—それについては後に述べるが—を踏まないものは、彼らが持っている異質性のためにいずれは排除されなければならなかったのである。

次に挙げる「桃太郎」の類話はそれを示すいい例である。

- (1) 爺と婆と桃太郎が住んでいる。爺婆は天気の良い日は、ちらしや稗の粉を挽いて団子をつくる。天気の良い日は、爺は柴刈り、婆は洗濯。桃太郎は遊んでばかりいる。爺は桃太郎に仕事をしろという。桃太郎は山へ行くが、木や柴の切り方を知らない。株になるような木を根本から引き抜いてかっいで帰る。家に着き、木を家にたてかけると、家がつぶれて、爺はめしぞうげに、婆は雑炊鍋に首を突っ込んで死ぬ。（『大成』3、徳島県三好郡）
- (2) 爺婆の息子の桃太郎は、草鞋、荷、緒、せな当てを作っていわれた四日目にやっと隣の若者と山へ木を切りに行く。桃太郎は大きな木の株に腰かけてしらみを取る。隣の若者は、一所懸命に木を切って、荷を作る。桃太郎はすわっていた木の株を背負い、一緒に帰る。桃太郎は木の株を裏のもだれにもかどにも置きかねて、前の川へ出る。川がめげ、その音が響いて大

きな地震が起こる。(同、岡山県阿哲郡)

ここでは、桃太郎はもうすでに仕事も出来る若者として登場しているが、彼の超人的な力のために、(1)では爺と婆が死に至り、(2)では地震が起こったとある。いずれも成人した桃太郎の尋常ならざる素性のために、育ての親及び共同体がそれぞれ被害を被る結末を迎えることに注目したい。両義的存在なる「異人」は人間に幸せや富をもたらす肯定的な存在である一方、他方では様々な危害を及ぼす存在でもあるとされるが、桃太郎も、場合によってはこのように共同体に危害を与える<負>的な存在になりうることを、この二つの類話は示唆している。

その後、この桃太郎達がどうなったかについては何も語られていないが、村の秩序を乱すもの、または乱すとみなされるものに対して共同体が厳しい処置を用意していたことは改めて言うまでもない。その一つである「村はちぶ」制について小松和彦は次のように述べている^{注5}。

村の秩序を乱すものが、村びとと限られているわけではない。村の外部に住む異人であったり、妖怪であったり、あるいは村びとたちが祀っている神仏である場合もあった。いずれにしても、村は村なりにそうした秩序の混乱を鎮めて望ましい秩序を回復するシステムを用意していたのである。その一つに「村はちぶ」のような村びと排除のシステムがあったといえよう。おそらく彼らは「村はちぶ」とされ、村の外へ追放されたか、あるいは殺されたか—いわゆる異人殺し—のどちらかの処断を受けたに違いない。

桃太郎が<異人>として歓待されるのは「小さ子」から脱皮して成人するまでのほんの短かな期間に過ぎず、彼が成人を迎えた時、事情は急変し始めたのだ。異人性を帯びたまま一人前の人間になってしまった桃太郎が、お爺さんやお婆さんのもとでそのまま定住するためには一つの手続きが必要であった。それは、己が背負っている異人としての負の側面、つまり、一つ間違えば<鬼>の属性となりかねない危険性を、自らの手で取り除いて見せ、自分が共同体にとって無害な存在であることを皆の前でデモンストレートするしかなかったの

である。

四

このようないわば浄化儀礼は他集団へ定住しようとするものにとっては避けられない宿命であったかも知れない。特に、〈よそのもの〉をタブー視する傾向の強い社会においては今なお見られることであるが、その方法は一様ではなく、「桃太郎」のように積極的なやり方で行われる場合もあれば、逆に消極的に行われるケースもある。もう一つの小さ子の物語である「瓜子姫」は後者に属するいい例である。

先に、「桃太郎」において、桃太郎や鬼がお爺さんやお婆さん側から見ればどちらも「異人」に過ぎなかったと述べたが、「瓜子姫」でも状況はまったく同様である。瓜子姫も桃太郎と同じく川の向こうから現れて異常成長を遂げているし、天の邪鬼も、〈邪鬼〉と呼ばれる境外的な存在であって、どちらも「異人」に他ならない。そして両者の性格においても、瓜子姫が「機織りが上手で、すぐ村一ばんにな」る美質を備え、お爺さんやお婆さんに可愛いがられるのに対し、天の邪鬼は「大人の留守に娘のいるところにやってきて、娘のりうつる」という悪行を果すものになっていて、それぞれ善と悪、正と負の側面を分け合っているところも「桃太郎」と一致している。

ただ問題は、「桃太郎」に見られる「異人による異人退治」の図式が「瓜子姫」でも見出されるかということであるが、以下それについて考えてみたい。

「桃太郎」と「瓜子姫」の関係について柳田は、

二話は主人公の男であり女である点に於て、明らかに相対立して居るけれども、他の幾つかの異なる内容は、大抵皆それから導かれたものであつて、始終を一貫した語りごとの筋路、即ち異常の経過を取つて人界に出現した童子が、後に成長して異常の事業を為し遂げたといふ要点に至つては殆ど左右一対と言つてもよい位に、一致して居たのである。

と、両者が対の関係にあると述べている。^{注6} 確かに、男／女、力持ち／機織

り上手、犬・猿・雉／鳥、鬼／天の邪鬼などのように、登場人物の間には対の関係が見られる。しかし、両話の「筋路」の「要点」がすべて一致しているわけではない。

たとえば、「桃太郎」では桃太郎が鬼が島に渡って鬼を退治しているのに対し、「瓜子姫」では天の邪鬼が留守番をしている瓜子姫のところへやってきて誘惑している。移動するものと、その方向が逆になっているのである。では、その異人同士の関係はどのようなものだったのか。まずは昔話にはどう語られているかから見ていくことにしよう。

「瓜子姫」は「桃太郎」とともにもっとも広い分布を見せている話であるが、地域によって二種類の内容が伝承されている。関敬吾によると、それは次のようなものである。

この昔話は<中略>内容から見ると東西やや明白に二つに別れている。

東北地方では天の邪鬼の殺害方法はきわめて残虐で、ときとしては姫の顔の皮をはがすことすらある。これに対して西日本では姫を殺すよりは誘惑して着物をはぎとって木に縛りつける程度である。これに対して天の邪鬼に対する処置はまさに逆で、東北地方ではたんに追放する程度であるが、西日本では天の邪鬼の両足を牛馬に結わえつけて股裂きする残酷な処罰を加えている。^{注7}

このように、(1)天の邪鬼の誘惑に負けて殺されてしまう話と、(2)裸にされ木に縛られるという恥を受けながらもそれに耐え抜いて最後は助かる話が併存しているということである。

「桃太郎」の場合、桃太郎の試練は彼の成人と不可分の関係にあったが、「瓜子姫」においても、試練はやはり瓜子姫が結婚できる年齢に達した時に訪れてくる。成人することが異人にとってどういう意味を持っていたかについてはすでに述べたが、主人公が女の子である場合、その浄化儀礼はどのような形で行われたのか。それは桃太郎のようにこっちから出掛けて解決する代わりに、向こうから訪れてくる天の邪鬼の<誘惑という試験>をパスしなければならないと

いう、受け身的な方法によってであった。

(1)では、瓜子姫は天の邪鬼の誘惑に負けて、殺されてしまう。誘惑に負けるということは、取りも直さず天の邪鬼が帯びている<悪しき聖性>に瓜子姫が同和されたことを意味する。瓜子姫の死は当然の結果ではなかったか。天の邪鬼に対する処置が追放で済むのは、瓜子姫の死によって共同体の内部の問題が一応解決されたことになるからであろう。

(2)では、瓜子姫は誘惑と恥という試練に耐えて、めでたく玉の輿にのる。天の邪鬼に同和しないことによって無害な存在であることを証明して見せた瓜子姫は共同体の仲間として認められ、その結果幸せな結婚が保証される。天の邪鬼が残酷な処罰を受けるのは、(1)で瓜子姫が死を迎えるのとは反対に、一身にすべての<悪しき聖性>を背負わされ、排除されるからであろう。

「瓜子姫」を「結婚の課程を語った昔話」だとし、天の邪鬼を結婚の「競争者」と見る見解^{注8}があるが、天邪鬼は結婚の競争者というよりは一種の試験台的な機能をしており、結婚も、試練の結果の賜物であってそれ以上の意味を持たないことは既述のとおりである。

ともあれ、この二つの話は<よその>が共同体の中に入って定住することがどれほど難しいことであったかを端的に物語っている。異人と共同体とのこのような厳しい関係は小ざ子譚一般に見られることで、何もこの両話に限るものではないが、それをもっとも対称的な形でドラマチックに伝えているのが「桃太郎」と「瓜子姫」と言えるのである。

五

以上昔話「桃太郎」において鬼退治がどのような意味を持っているかについて述べてみた。「桃太郎」が英雄の話として解釈され、教えられていた時代に、鬼退治譚は常に若武者の華々しい武勇譚として受け取られてきた。この若武者が正義の味方なのか侵略者なのかという議論はあったが、彼が英雄であるという見方には変わりがなかった。

しかし、このような解釈は、実は江戸時代以来の尚武精神の影響のもとで生まれたきたものであった。つまり、時代の要請が、桃太郎という偶像を作り出していったのである。

が、このような時代的な粉飾を取り払って読み直してみると、そこからは英雄というよりは、排除という共同体の論理と意志の前に翻弄される一人の異人の姿が浮かび上がるのみである。そういう意味で私は「桃太郎」を、共同体と異人との間で展開される排除とその克服の物語と捉えたい。

昔話は「単に過去を語るのではなく、普遍的人間の生活の現実を語るもの」であり、また「民衆が創り出した、彼らの所有する《知識》の記憶措置あるいは貯蔵庫であり、さらには次の世代にそれを伝えるための教育装置」^{注9}でもありと言われている。昔話「桃太郎」がわれわれに語りようとしているものを考えていく上で、極めて示唆するところの多い指摘ではないかと考えられる。

註

- (1) 『定本 柳田國男集』 第八卷。昭和三十七年二月。筑摩書房
- (2) 野村純一。ちくま文庫『柳田國男全集』の8の解説。
- (3) 『異人論序説』 1985年12月 砂子屋書房。
- (4) 『神話伝説辞典』の「小さ子話」項目。東京堂出版。
- (5) 『悪霊論』 80頁。青土社。1989年10月。
- (6) (1)と同じ。
- (7) 『日本昔話大成』 3「瓜子織姫」の注。
- (8) 関敬語 「ヨーロッパ昔話の受容」—<白い嫁黒い嫁>を例として—（『日本の説話』 6 近代所収）東京美術。昭和四十九・三
- (9) 小松和彦 「民話継承の道標」 読売新聞。1976. 3. 8 朝刊（後『日本昔話研究集成』 1の「昔話研究の課題」に所収。名著出版、昭和六十・六）

討議要旨

三角洋一氏から「弁慶の異常出生譚」や「伊吹童子」の話と関係づけて考えていくと、一層面白い研究になろう、との示唆があった。また、糸川光樹氏から、「共同体に対して、どういう意味で「異人」であるのか、どういう意味で「異質」であるのかということ、さらに細分化する必要があるのではないか」という意見が出された。